

季節風

常任理事 柳 内 統

ラニーニャ

今年の冬は異常である。12月下旬まで雪が降らないことはあるが、1月に雨が降るなどというのは稀有である。雪まつり初日に雨が降った。雪像を作られる方々のご苦労は想像するに余りあるが、ゴルフファンには、思わず暖冬はうれしい珍事だそうである。毎年家の周囲の除雪に悩まされる小生にとっては寒さが厳しいほうがまだいいように思う。

これはエルニーニョ現象なのだろうか。エルニーニョ現象は、太平洋赤道域の中央部(日付変更線付近)から南米のペルー沿岸にかけての広い海域で、海面水温が平年より高くなる状態が1年以上続く現象を指すが、最盛期であった1997年11月には1°Cから4°C以上も高くなかった。これとは逆に、同じ海域で海面水温が平年より低い状態が続くのはラニーニャ現象とよばれている。

低迷が続く医療界はエルニーニョではなく、例えるならばラニーニャ現象であろう。低温はまだしも医療制度が冷えるのは許せない。新聞は経済状態が良くなったと報じているが、周囲を見渡してもその気配は感じられない。銀行が元気になれば医療界も息を吹き返すと思われているのだろうか。

最近医療界の話題が新聞紙上を賑わることが多い。道内各地で起きている医師の引き揚げ、特に産科、小児科、麻酔科の勤務医が激減し、地域医療が窮状に陥っている。産婦人科医師の引き揚げで、総合病院の産婦人科の存続が危うい状況になっている。新聞は連日のように道内各地の医師不足の状況を報道している。その対応に首長さんや病院関係者が奔走している…。小生が住む人口約36万人の北海道の第二の地方都市である旭川市も例外とは言えない。

当然残った勤務医にしわ寄せがくる。過重労働が医療事故の引き金になる。地方にあってさえ、患者や家族からはそれなりの高度な医療を要求される時代である。夜間急患に起こされ、寝る間もなく外来に追われ、午後から定期手術、途中入院患者家族に説明。守秘義務違反で逮捕されるのではないかと考えるほど、違う人が何度も聞きに来る。

どうしてこんな現象が全国的に起こったのだろう。新しい卒後臨床研修医制度ができる、都市部の研修システムの整った医療機関に研修医が移動するのは大学教育に問題があるからだという人もいるが、そればかりではないだろう。医師数が減少したからだとも言われるが、毎年8千人の新たな医師が生まれている。リタイアする医師を差し引いても毎年4千人が増加している。勤務医の過重労働に嫌気がさして、開業する医師が増加しているという意見もある。全国的にみると想い当たる医師もいるかもしれない。しかしこれが全ての原因ではないはずである。

日々の診療の中で自分が携わった診療の成果や手術成績を世に問いたいと、本州で行われる学会に発表したいと望んでも、出席する時間も確保できない環境であれば、そのための勤務医か疑問に思う。勤務医を続けるためのモチベーションが維持できなければ勤務医を辞めざるを得まい。給料が安いから辞めるのではなく、自分自身が保てないから辞めていくのである。

こんな過酷な状況にある勤務医にホワイトカラー・エグゼンプション(時間外労働規制一部撤廃)なる言葉を浴びせないでほしい。